

# 山村における民際交流を通じた MURA づくり

## —南魚沼市栃窪地区を事例として—

田 村 優

### Abstract

Today, various *murazukuri*, movement to improve the living in villages are being orientated all over country. The study area of this paper, Tochikubo is doing the same; however, a little differently from well-seen *murazukuri*. It is more appropriate to call the action in Tochikubo *MURAZukuri* in English than *murazukuri* in hiragana because of their *minsai* exchange (cross-cultural people to people) activity. A lot of outsiders including foreigners visit *Tochikubo* every year and local residents seem to be enjoying the activity.

This case study considers the following: how '*mura*' in hiragana is changing, how MURA in English is being constructed and how '*mura*' and MURA are interacting with each other, and shows that '*mura*' is not turning to MURA but coexisting together in Tochikubo. That is to say, on the one side, long-standing customs and norms are maintained and on the other side, global thoughts and interests towards foreign countries are spreading among local residents. The coexistence sometimes brings struggles but in the case of Tochikubo, 'Mediators' are working out the differences between '*mura*' and MURA.

キーワード……民際交流 山村 「むら」

### 1 問題の所在

今日、全国で多様な村づくりの試みがなされている。それは、一方で2008（平成20）年のリーマンショックを契機とする国際的な経済危機以降、環境・経済面での持続可能性という観点から農山村はその価値を見直され、経済至上主義に代替する新たな「豊かさ」の指標が求められているからであり、他方で、例えば2006（平成18）年には、全国で7878の限界集落が存在することが明らかになったりように、高齢化や耕作放棄地の増加により、多くの農山漁村で集落機能の弱体化が進み、農山漁村の状況が悪化しているからでもある。

本論文で扱う栃窪も同様に、むらづくりに取り組んでいる。ただ、栃窪の場合は、むらづくりではなく MURA づくりと呼ぶにふさわしい。というのも、村人は栃窪を TOCHIKUBO とし海外に発信しており、毎年多くの外国人が訪れているからである。村人はそうした民際交流の場を楽しんでいる。このように、海外とつながりをもつむらにおいて、MURA がどのように

構築されているか。また、どのような点では未だに「むら」であり、MURA とどのような関係性を築いているのか。本論文ではそうした桁違ならでの MURA づくりに注目して今日のむらのあり方について論じていきたい。

以下、まず 2 では、先行研究の検討を通して本論文の課題と調査方法を提示する。続いて 3 では、調査地の概要を紹介する。その上で 4 では、MURA がどのように構築されているかを考察する。併せて 5 では、調査地の組織の機能を概観し、むら機能について考察する。さらに、6 では、MURA の関係性について考察する。以上の検討から明らかになったことを 7 で総括する。

## 2 先行研究の検討

### 2.1 むらへのまなざしの変遷

むらは各時代によって様々な語られかたをしてきた。「封建的性格」が強調されることもあれば、「相互扶助的性格」が見直されることもあった。

戦後は、むらの「封建的性格」について活発に議論されてきた。地主を中心としたヒエラルキ的構造である「保護と奉仕によって結ばれた温情的な主従関係」がむらを支えていたとしてむらの「封建的性格」が問題視されたのである (福武 1946: 12)。

1950 年代には村落共同体論争が展開され、1960 年代からむらの再評価がなされるようになった。その背景には、都市における人びとの共同性の不在や農村から都市への人口流出、出稼ぎの増加などによりむらの共同性が弛緩することへの危惧があった。この時期、村落社会研究会を中心に、むらの「解体」が活発に議論された。しかし、むらは「解体」とともに時代に合わせて「再編成」されてきたのであり、「むら」は現在にまで依然として存続している (中野 1966)。ここで、かっこがつけられるのは、むらは「前近代的、封建的」でありながらも「近代」の村として「生きている」のであり「各時代の特質」を持つからである (中野 1966:257-258)<sup>2)</sup>。

現代において、特に注目されているのが自然資源の共同管理という側面からのむら機能である。中田実はそのようなむら機能を「地域共同管理」機能に注目することで説明している (中田 1993)。鳥越は、以上のようなむら機能をめぐる議論を「地域自治会」に注目して論じている。「地域自治会」は、非民主的であることや単位が個人ではなく「家」であることが協調され、批判されてきた。しかし、鳥越は、開発に対する住民運動などの場合において、家を単位とする自治会がその力を発揮すると指摘している (鳥越 1994)。

### 2.2 農山村の再生

農山村の価値が再考される中、農地や山林の管理、伝統文化の継承、収入や情報の取得などを通じた再生を実現するために、多様なアクターと協働しつつ、様々な試みがなされている。その中でも代表的な取り組みとしてあげられるのが、1990 年代に展開しはじめたグリーンツー

リズム／都市農村交流である。いまや農村は「農産物の供給」の場というだけでなく、「景観」や「文化」といった観点からも評価されている。グリーンツーリズム／都市農村交流はそうした農村の側面を活かした取り組みであり、全国各地で行われている（荒樋 2008: 10-15）。

このような取り組みは、むら内外にプラスの効果をもたらしていると言われる（宮城 2008、小内 2007）。しかし、「都市農村交流やグリーンツーリズムだけでは農山村の維持や振興にはならない」という主張もある。というのも、「都市人との交流に意識やエネルギーが集中している間に、農村内部の構造的な弱体化がさらに進む可能性がある」からである（徳野 2008: 43-44）。

ただ、交流する目的は、移住の促進や集落機能の補完だけとは限らない。各地で「楽農」「集楽営農」などという用語が見られるように、今日、むらづくりを「楽しむ」ことが重要視されている。秋津はそれを<争>から<楽>という原理への転換と捉えている（秋津 2009: 229）。グリーンツーリズム／都市農村交流によってむらを「活性化」することはできないとしても、村人の生活の質を向上させることにつながる可能性がある。つまり、むらを人口が多く活気があった昔のように復帰させようとするのではなく、「縮小論」<sup>3)</sup>的な視点に立てば、無理をせずに楽しんでむらづくりをすること自体が目的となる。グリーンツーリズム／都市農村交流をはじめとするむらづくりは、取り組み方によって、村人の負担にも生活の質の向上にもなりうるのである。

### 2.3 民際交流という取り組み

今日、各地で多様な人物との交流を通じたむらづくりが行われている。たとえば都市住民を対象とした都市農村交流、大学生を対象とした域学連携、外国籍の人々を対象とした民際交流などがある。同じ交流でも、誰を対象とするかで目的は大きく異なるようである。

鹿児島県鹿屋市に「からいも交流」という活動がある。日本在住の留学生を農家にホームステイさせるため、1982（昭和 57）年に開始した。「民際交流を通して鹿児島の農民に自分達の伝統と文化に対する誇りを取り戻し、新しい村づくり運動を起こした」という評価を得ている（佐藤 1997: 5）。仕掛け人の一人である加藤憲一氏は「農村を再生させるためには、まずもって農民自身の意識改革が必要」という信念を持っている。交流を通して「封建的」な性格を持つ農民の意識が改革され、農民が「世界を見つめ足元を固めること」につながるのだという（佐藤 1997: 12）。

また、佐賀県に「地球市民の会」という団体がある。主な活動は、国際交流、国際協力、地域づくり、地域共感教育である。国際交流活動では、これまでに留学生を佐賀の家庭にホームステイさせる「小さな地球計画」、韓国で勉強している大学生や企業を対象とした「かちがらす計画」などを行っている。地球レベルの課題を地域で考えることを重要視しており、それを共に考えることによる「全人的な人間の成長」を目的としている。

## 2.4 課題と調査方法

先行研究の検討から、むらはその時代背景によって様々な語られ方をしてきたということ、農山村への価値の再考により「自然資源の共同管理」という自治体的機能が期待されていること、グリーンツーリズム／都市農村交流は、意外にも村人の負担になりうるということ、民際交流を通じた地域社会および個人の「変革」や「成長」が期待されていることがわかった。

以上のことから、農山村再生への取り組みとしての「交流」を再考するために、民際交流の事例を検討することは重要であると言える。しかし、同様の研究は佐藤（1997）以外に見当たらない。民際交流を扱ったものは少なからず存在するものの、そのどれもが自伝や記事として報告されている。さらに言えば、本論文の調査対象地である栃窪のように、むらを単位に民際交流をする事例は報告されていない。

そこで、本論文では、栃窪が海外とつながることでのどのように MURA を構築しているか。どのような点が「変革」され、どのような点は変わらないのか。また、「むら」と MURA にはどのような関係性があるのか。それらを「仕掛け人」や「支え人」<sup>4)</sup>といったキーパーソン、一般の村人への聞き取り、イベントや定期集会での参与観察、区会議事録の史料によって明らかにする。

調査方法は、村人への聞き取り、イベントや定期集会での参与観察、区会議事録の読解である。聞き取り調査は、2015（平成 26）年 2-3 月に、若者 4 人（20-30 歳）、壮年 5 人（40-64 歳）、高齢者 6 人（65-歳）、リーダー層 4 人、NPO 職員 1 人、計 21 人に対して実施した。実施場所は、インフォーマントの自宅と集落センターである。また、4 章で述べる 2 人（K さん夫婦）のみ、2015（平成 26）年 12 月に再度聞き取り調査を行った。その際、質問項目は用意せず、インフォーマントの話に合わせるかたちをとった。参与観察は、2014（平成 25）年 4 月～2015 年 12 月にかけて計 8 回実施した。イベント、定期集会というのは、都市農村交流（田植え、稲刈りが各 1 回）、栃窪小学校運動会、高齢者のふれあいサロン集会、棚田草刈りアート日本選手権大会（後述）、注連縄作り、栃窪小学校放課後スクール、子どもキャンプ（雪あそび）、サイの神、なめこのこま打ちである。区会議事録は、集落センターに保存されていたもののうち、1938-2014（昭和 13-平成 26）年度を扱った<sup>5)</sup>。

## 3 調査地概要

### 3.1 栃窪地区概要

新潟県南魚沼市（旧南魚沼郡塩沢町）栃窪地区（以下、栃窪とする）は、十日町市との市境である魚沼丘陵に位置する中山間地域である。中世から近世にかけては、両地を結ぶ中継地として重要な役割を担っていた。1906（明治 39）年の合併により旧塩沢町に併合された。

標高 500m前後の豪雪地帯に位置する栃窪は、例年 4m 程度の積雪にみまわれる。現在でこそ「平場」<sup>6)</sup>への通勤が可能となったが、1960-70 年代に道路が舗装整備されるまで、冬季の通行はままならなかった。村人による国、県、町への働きかけにより、現在は朝夕 2 回の除雪もあり、町への通勤が可能となっている。

1990 年代に入ると、人口が減りむらが「寂しく」なってきた。そのような状況は好転することなく 2000 年代を迎えた。その後しばらくして町から小学校統合の話が持ち出された。2005（平成 17）年の中越地震で集落自体が深刻な土砂被害をうけたことや大和町・六日町との合併の話がでていたことから、2006（平成 18）年には廃校になる寸前までいったのだという。そこで村人は結集した。2007（平成 19）年には NPO 法人 ECOPLUS（以下エコプラス）をむらに呼び寄せ、それ以来、エコプラス、小学校、村人共同でむらづくりに取り組んできた。具体的には、エコプラス、小学校、村人の協働事業として「TAPPO やまとくらしの学校」を開始し、農業体験（田植え、草刈、稲刈り、代かき）を通じた都市農村交流活動を行っている。小学校は同年に特認学校として認定され生徒数は少数ながらも存続をしている（2014 年時点で児童数 11 名）。2006（平成 18）年には、村の有力者（後述）が中心となり「とちくぼパノラマ農産」という有限会社を設立した。以来、集落営農および米の直販を行っている。

### 3.2 人口と世帯の推移

栃窪の 2014（平成 26）年時点での人口は 176 人、世帯数 54 世帯であり、年代別人口比率は 65 歳以上が全体の 37%、15-64 歳が 52%、0-14 歳が 11%である。大野晃の区分によると栃窪は準限界集落である。人口と世帯数の移り変わりを見ると、1972（昭和 47）年には 387 人 80 世帯であったのが、1981（昭和 56）年に 300 人を切り（295 人、75 世帯）、2011（平成 23）年に 200 人以下となった（190 人、58 世帯）<sup>7)</sup>。

世帯数 54 世帯（そのうち 2 世帯が 2014-2015 年に絶家、他出した）のうち、12 世帯が 3 世代である。一方、高齢者のみの独居世帯は 6 世帯あり、このような世帯は近所や同族であるマキからのサポートを受けながら暮らしている。また、中には、春から夏までを栃窪で過ごし、秋になると娘・息子のところに滞在する高齢者、町に移住したものの耕作は続けているという世帯も存在する。他出した場合も、区会やむらのイベントにも参加していることが多い。農業を続けているのは、24 世帯である。

## 4 MURA づくり

### 4.1 民際交流を通じた海外とのつながり

栃窪は 2007（平成 19）年より NPO 法人エコプラスをむらに受け入れ、環境教育活動を行ってきた。2007 年から、エコプラス、小学校、村人の協働事業として「TAPPO やまとくらしの学

校」(以下、TAPPO)を開始し、農業体験(田植え、草刈、稲刈り、代かき)を通じた都市農村交流活動を進めている。エコプラスがむらに入ってから来て以来、栃窪はその魅力を TOCHIKUBO として世界に広く発信している。2009(平成 21)年には「The Economist」に「You are what you eat」というタイトルで栃窪が紹介された。

以上のようなメディアによる発信と同時に、人と人の付き合いである民際交流を通じて MURA が構築されている。きっかけとなったのは、エコプラス代表の高野孝子さん(以下高野さん)が始めたヤップ島プログラムである。高野さんは、栃窪で活動を始める以前から、ヤップ島で環境教育のスタディツアーを行っていた。その活動の一環で栃窪へヤップ島民が訪れたのがきっかけである。その後、エコプラスが栃窪に事務局を開き、海外から多くの人々が訪れるようになった。

たとえば、毎年、外資系銀行の職員が農作業ボランティアに訪れる。某銀行が CSR の一環として行っている活動であり、銀行内では募集定員以上に応募者が集まる人気イベントだという。外資系銀行の職員は多国籍であり、日本語が話せない人も多い。そのため、共通言語は英語である。毎年、英語が堪能な日本人職員が何人も同行し、村人の通訳をしている。英語と日本語が飛び交う農作業となる。また、銀行員であるせいかビジネスの話になることが多い。いつのまにか「この米をインドで売りたい」とインド出身の職員が言い出し、パノラマ農産社長と連絡先を交換しているようなこともある。

2015(平成 27)年、高野さんが早稲田大学で准教授をしている関係で、栃窪はアメリカ人の学生インターンを受け入れた。アメリカ・インディアナ州にあるアーラムカレッジの学生 2 人である。彼女たちは、1 ヶ月半ほど滞在し、パノラマ農産の手伝いや小学校訪問を通してエコプラス職員の補助を行った。村人は、日々彼女たちと交流したという。

その他、日本在住の留学生や社会人がイベントに個人として参加することも珍しくない。2014(平成 26)年の草刈アート選手権には、オランダからの選手が参加した。英語で話すことに抵抗を感じる村人は多いものの、通訳さえいれば積極的に話しかけている。海外での生活に好奇心を抱く村人は多く、そこから栃窪との共通点・相違点を見出しているようである。また、海外の人々が来ることを多くの村人が「誇り」に思っており、町の人々に「消極的な自慢」をする傾向がある。つまり、「アメリカ人がまた来たて」と口では否定的に語りつつも具体的な話となると、嬉しそうに英語を交えて、海外の人とどのような話をしたかを語るのである。「いやーヤップの人の足がビッグなのなんの」といって語る村人は、いつもにも増して楽しそうである。

## 4.2 仕掛け人と支え人の思想

### 4.2.1 仕掛け人の高野孝子さん

栃窪には毎年海外から多くの人々が訪れている。その契機となったのが、エコプラスの関与である。代表の高野さんは、海外を冒険家として旅してまわった後、栃窪で環境教育活動を始

めた。そのため、高野さんの個人的なつながりを通じて毎年海外から多くの人が訪れている。高野さんはもともと旧塩沢町出身であり、現在早稲田大学の准教授である。世界各地を渡り歩いた後エコプラスを設立、2006（平成18）年から栃窪で活動を開始した。活動開始当初は、「平場」や都会の児童向けに栃窪で環境教育活動を行っていた。

その思想の根底となるのが世界を飛び回って得た様々な気づきである（高野 2010b）。世界での様々な体験を通して、高野さんの環境教育実践の手法となる「地域に根ざした教育（Place-Based Education、以下 PBE）」が培われた。PBEとは、「ある場所に注目し、そこにある暮らし、社会、経済、事業、自然環境、動植物、文化、芸術、伝統、光景などすべてを、全体として学びの場とするもの」である<sup>8)</sup>。「この学びを通じて、個人と集団に、幸福・福祉の向上、アイデンティティの確立、格差・抑圧からの解放といった成果が期待」されるとともに、「公正で、生態的に持続可能な社会づくりにも貢献する」とされる（高野 2014: 10）。

栃窪では、この教育方法を実践している。先述した通り、栃窪ではエコプラス・村人・小学校の協働で環境教育活動を行っている。高野さんによれば、このような教育を実践することにより、子どもたちは「自分たちがどこでどう暮らすか」「どう生きるか」について考え・選択できるようにするのだという（高野 2014: 19）。

#### 4.2.2 「支え人」の K さん夫婦

むらづくりには、「仕掛け人」と同時に、彼／彼女を支える「支え人」の存在が欠かせない。特に「仕掛け人」が外来者である場合は、むら内外の意見をくみ取ることのできる「支え人」が必要である。栃窪の場合は、以下述べる K さん夫婦が代表的な「支え人」だといえる。

K さん（60代）は、旧大和町で始まった「南魚沼アジア交流会」に所属しており、活動の一環で海外を訪れたことがあった。これまでに韓国、シンガポール、モンゴルを訪れている。その中でも、モンゴルとのつながりが強く、計8回訪れている。日本在住のモンゴル人ともつながりがあり、電話や手紙を通じて付き合いを続けている。

K さんは栃窪出身の H さんと結婚し、栃窪と関係を持った。K さんは元幼稚園の先生、H さんは元小学校の校長である。K さん夫婦は、1982 - 83（昭和 57-58）年に旧六日町から栃窪へ引っ越してきた。H さんの転勤によるものである。「栃窪へ帰って来てからしばらくはよそ者扱いされていた」という。しかし、現在二人への村人からの信頼は厚いものである。H さんは 2003（平成 15）年に退職し、その後 10 年間区長・副区長を歴任していた。

その一方で、K さんは区会からは離れ自由に活動をしている。様々な活動をしており、栃窪だけでなく旧塩沢町の有名人である。モンゴルとの国際交流活動の他に、栃窪かあちゃんず（後述）の代表、高齢者が集まる「ふれあいサロン」の運営、栃窪小学校に通う児童向けの「放課後スクール」の運営を行っている。現在目標としているのは、自宅におけるカフェの経営だということ。すでに自宅をリフォームして村人にお披露目会をした。「なんでもやってみよう」という

心意気である。理想とするむらのあり方は、「ブータンの幸せ」だということ。長い間外に出ていたからこそ出てくる発想なのかもしれない。

アメリカからのインターン生が来た時も、Kさん夫婦が二人を受け入れた。自宅には、その一人であるテンジンが描いたKさん夫婦の似顔絵が飾られている。民際交流の醍醐味は、「お互いのライフスタイルが垣間見えること」だということ。朝早く起きることが苦手であったベロニカに「ウェイクアップ！農家の朝は早いよ」と小言を言っていたことを振り返り、「良い思い出だ」という。

普段から海外の人と接しているせいか、二人は時折英語を交えて会話をしている。しかし、村人との間となると、すばやく柄漕弁に切り替わる。一切英語は含まれない。「むら」の中ではなるべく謙虚に、目立たないように。それでいて、しっかりとやるべきことや信念は付き通す。だからこそ、エコプラスとむらの間に入り、やってこられたのだろう。

以上のような行動は、高野さんの思想を影ながら支えている。「むら」の人間関係も心得ながら高野さんの思想を理解し、どう折り合いをつけて活動をすべきかを的確にアドバイスできる二人である。また、サポートが必要な際は、何も言わずに手を貸している。そのため、エコプラスの職員は相談事があると必ずKさん宅の戸をたたいている。エコプラスとむらをつなぐ橋のような存在である。

#### 4.3 考える村人たち

夢が海外に行くこと、海外の山に登るなどして自然を体験することだという人が出てきている。これは、冒険家である高野さんに影響を受けてのことだろう。実現するしないに関わらず、本気で考えている。しかし、エコプラスのプログラムはお盆休みに開催されることが多く、村人はなかなか参加できないという。

また、多くの村人が英語を学ぶ必要性を感じている。イベントなどで訪れる外国人を前に直接会話ができないことをもどかしく思っている。通訳ができる人は限られておりなかなか会話ができないのである。そのようなもどかしさから、個人的に英語を勉強する人もでてきている。

多くの村人にとって柄漕に外国人が来ることは、「自慢」である。町にもヤップ島、オランダ、インド、アメリカ人と定期的に交流する人はなかなかいない。町の人びとや都市住民に会うと、「インドでは～」、「アメリカでは～」と言い、交流によって得た情報を誇らしげに語っている。それは時に「アメリカ人が来て大騒ぎだて」と言うように批判的に語られる。しかし、よくよく聞いてみると「異文化体験」に驚き、刺激を受け、楽しんでいることがわかる。

柄漕に来る外国人は、その多くが有機農業や環境教育に関わる人物である。そのため、「変な人が多い」。ただ、「だからこそ面白い」のだという。彼ら／彼女らは、柄漕の暮らし方に興味を持ち、「根ほり葉ほり色々なことを」聞いてくる。また、「なんでも気軽にやってみようとする」のである。それは都市住民でも同じことかもしれない。ただ、外国人は特に「反応や感動



が大きい」という。村人はそのような「反応」や「感動」、そして「興味」を持たれることによって、自分たちの暮らしの価値を見直している。また、都市住民には「気張って言えないことも気軽に言うってしまう」のが外国人である。「ここのことを一から説明しようと思うと、何でも話してしまう」。また、都会の人には「こんなこと話す必要ないだろう」と思うようなことも、外国人だと「説明しなくては」と思うという。また日本の農山村代表として語ることによって満足感を得ている。また、世界の流れの中で自身の立ち位置を再考することにもつながっている。「変な」外国人と多く接し、多様な情報を得るからなのかもしれない。

以上のように、村人にとって民際交流は、自身の生活を見直し、世界の中での立ち位置を考えるきっかけとなっている。また、英語を独学ではじめる人や海外に行くことを目標とする人などがいることから、日々に充実感を与えているとも言えよう。

#### 4.4 「平場」からの評価

栃窪の村人は高度経済成長期において後進地域とされていた。そのような「平場」からの評価が変わりつつある。「何故あのむらに都市や外国から人が来ているんだ」と不思議がられつつも、期待されているのである。

まず、「平場」から栃窪を訪れる人が増えている。棚田草刈りアート日本選手権大会には、多くの人が「平場」から訪れる。観客としての参加、選手としての参加、両方である。エコプラス主催の子どもキャンプにボランティアとして参加する高校生や参加者の一人として参加する子ども（小学生）もいる。参加の動機は、「都市の人と交流したい」、「なかなかこんな大自然の中で遊ぶ機会がない」、「ここの良さを知ってもらいたい」など様々である。

また、「平場」と比べて「劣った」山村というイメージから、「何故だか注目されている」山村に変わってきている。その「何故」という問いは、多くの場合新聞（『朝日新聞』2014.6.2 朝刊など）やテレビ（NHK『小さな旅』2014.3.9 放送）によってもたらされ、「平場」の人が注目するきっかけとなっている。それは「洒落たもの」として「農」や「食」を捉える全国的な動向ともかかわっている。

さらに、外国人との民際交流も再評価される要因である。旧塩沢町に他にこのような取り組みをしているところはない。気軽に外国人と交流し、英語を話す機会などないに等しいのである。それが出来る栃窪を村人は「すごい」と見直すとともに、栃窪を再評価するきっかけとなっている。

## 5 「むら」の存続

### 5.1 区会

栃窪には区長1人、副区長1人、区会議員9人で構成される区会が存在する。区会議員の任

期は3年であるが、区長と副区長の任期は1年と短い。区会議員は行事には必ず出なければならず、仕事を休んで出席することが多い。

1999（平成11）年から2014（平成26）年まで、元小学校校長であるHさん（70代）と市議会議員であるFさん（60代）が区長・副区長を交替で歴任してきた。この時点でマキではなく、個人の実力によって選出されるようになっていた。しかし、2014（平成26）年に二人が「そろそろあげてほしい」と申し出たため下の代で相談をし、代替わりをするに至った。また、区長・副区長の任期を3年から1年に変更した。その結果、2014年には、むらの中の有力者というよりも退職を間近に控えた「気さくに話しができる」区長が選任され、2015年には、区長が「俺がやったのだからお前もやらねば」と声をかけた同じく退職を間近に控えた人物が選任された。「校長」や「市議会議員」（元市役所職員）という肩書きではなく、人付き合いの上手い人、時間的経済的に余裕のある人が区長・副区長に選ばれるようになっている。

元区長や区会議員からの聞き取りにより、区会は多くの人にとって「負担」となっていることがわかった。「区長は経済的に安定している人がする仕事」、「やりたくないけど仕方がないからやっている」、「話し合いではなく、決められた事項が報告される」、「話しあってもむらは良くなっていかない」などの意見があった。また、役職の中には「昔のなごり」が残っており、ほとんど仕事のないものがあるということがわかった。とはいえ、区会議員は集会にはできる限り顔を出さねばならない。また、行事には仕事を休んででも参加する人が多い。行事というのは、道普請などの共同作業、小学校行事、エコプラス主催の行事を問わない。自身が担当する行事はもちろん、担当でない時も出来る限り参加している。ここにはむらの縛りの強さを見出すことができる。このような「縛り」を否定的に語りつつも、区会議員であることに「誇り」を見出す人物は多い。「俺たちが中心になってむらを盛り上げていく」や「今回の行事でのスピーチしっかりやらねば」など、何だかんだ言って楽しんでいる人もいる。その様子は各行事でも伺えた。

## 5.2 同族と隣組

栃窪には10つのマキと称する同族が存在する。マキ内部においては、様々な面からいまだに関係を維持している。たとえば、結婚式や葬式に必ず同じマキのメンバーを呼んでおり、彼岸参りも多くの家が継続して行っている。また、土地に関しては、特にマキのつながりが深いと言える。まず、田んぼの委託をマキ中心に行っている。パノラマ農産に委託している世帯を除くと、未だに多くの世帯がマキ内で委託を行っている。さらに、家族内における重要な出来事は、必ず本家に相談報告に行くという分家が多い。

土地の所有面積（非公開）と1957（昭和32）年以降の区会役員変遷（表1）から、マキ⑤⑥が栃窪において有力であることがわかる。また、1980年代後半までは特定のマキから区会役員が選出されていることがわかる。役員の選出回数は⑤が一番多く、その次に⑥、①と続き、②

④や③⑦に至ってはほとんど選出されていない。区長と副区長は特にその傾向が顕著である。1980年代後半までに選出された区長、副区長のほとんどが⑤か⑥から選出されている。しかし、1980年代後半を境に、⑧⑨⑩を含むマキから選出されている。表5に見られるように、今日においては、マキによる差異はほとんど見られない。

隣組では、現在回覧板のやり取り、葬式の手伝い、結婚式への参列などの付き合いがなされている。立地的にも近所であり、日常におかずやお土産のやり取りをしている世帯も存在する。

独居となった高齢者のサポートをしているマキや隣組も見られる。具体的には、病院に行く際の車による送迎、雪の処理、お裾分けなど、出来る範囲で手を差し伸べている。

マキと隣組の構成員が一致しているのは2つのマキのみである。その他は、立地的に離れていることが多く、一致していない。

表1. 1957（昭和32）～2014（平成25）年の区会役員変遷

|            | 区長 | 副区長 | 神事部長 | 財務部長 | 教育部長 | 土木部長 | 山林部長 | 産業部長 | 観光部長 | 消防部長 | 保険衛生部長 | 社会部長 | 総務部長 |
|------------|----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|--------|------|------|
| 1957(昭和32) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1958(昭和33) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1959(昭和34) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1962(昭和37) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1965(昭和40) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1967(昭和42) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1968(昭和43) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1969(昭和44) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1972(昭和47) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1974(昭和49) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1975(昭和50) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1976(昭和51) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1978(昭和53) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1980(昭和55) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1982(昭和57) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1983(昭和58) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1987(昭和62) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1989(平成1)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1991(平成3)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1992(平成4)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1993(平成5)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1994(平成6)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 1997(平成9)  |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2002(平成14) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2004(平成16) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2005(平成17) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2006(平成18) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2007(平成19) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2008(平成20) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2012(平成24) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |
| 2014(平成26) |    |     |      |      |      |      |      |      |      |      |        |      |      |

(出所) 1957（昭和32）～2014（平成25）年区会議事録より筆者作成。

### 5.3 定住という「選択」

栃窪の村人は、年齢に関わらず栃窪での定住を望む人が多い。ただ、それが「積極的な選択」によるものか、「消極的な選択」によるものか、そもそも「選択」をしているか否かが年代によって異なる。

壮年層（40-60代前半）は、消極的に定住する道を選択する傾向にある。各々「悩み」や「不満」を抱えながらも「先祖が守ってきた家や土地があるから」定住するという選択をしているようである。

高齢者（65 歳以上）となると、定住はもはや「選択」ではない。「当たり前」のこととして住み続けているのであり、「病気」や「家族の反対」がない限り「離れる理由はない」のである。

その一方で、むらに残る若者（20-30 代）は、積極的に「定住」を選択していることが多い。栃窪には、20 人という比較的多くの若者（18 歳-30 代）が残っている。彼／彼女らはむらの暮らしを誇りに思っており、時に都市について否定的に語る。都市は、「臭い」、「人いすぎ」、「たまに遊びに行くけど住みたいとは思わない」と言う。一方で、「ゆったりした時間を過ごせる」、「自然に恵まれた」、「年功序列でない」むらを良いところだと言う。しかし、もちろん良いところばかりではない。「冬に（平場の）飲み会行くと、雪降って帰れなくなる」、「たくさん子どもつくれつくれと言われる。そんなつくる金ない」、「むらの飲み会で無理やり飲まされるのが嫌」というような不満もある。ただ、良いところも悪いところも受け止め、定住という選択をしている。また、不満や不便さは、助け合いによって解決している。たとえば、妊娠するといつ出産を迎えるかはわからない。家に誰もいない時にその時が来てしまうこともある。そんな時のために、日ごろから「その時はよろしくね」と言える関係があることに「感謝している」。そのような関係は、定期的な飲み会によって築かれている。栃窪の若者は本当に「仲が良い」。むら内に小学校があり、小・中・高を問わず、そこに集まっていたからかもしれない。彼ら/彼女らは、定期的にむら内の家に集まり、飲み会を開いている。

以上のような発言を聞いていると、区会に参加せずイベントも「自由参加」であるため、壮年層が抱えている悩みが未だないだけでも捉えられる。しかし、壮年層にとっては「負担」であり「義務」である区会に「関わりたいと思う」若者も存在する。以上のように、壮年と若者で、むらの人間関係に対する見解が大きく異なることがわかる。これは、環境教育の影響だとも考えられる。現在の 20 代は、環境教育を受けた最初の世代である。「この前、モリアオガエル見たんすよ。モリアオガエルって知ってます？ いやー天然記念物っすよ。やっぱこれは守っていかなきゃなーって」と言う 20 代がいるように、自然の豊かさを見直すことで栃窪で暮らしていきたいと思う人もいる。

以上のように、栃窪の若者を中心としてむらの価値が見直され、定住や U ターンにつながっている。近年、出産が続いた上、他出子が子どもを連れて帰って来たため、子どもが 5 人増えた。

## 6 MURA と「むら」の関係

### 6.1 事例 1. 有力者による「とちくぼパノラマ農産」の設立

村人はむらづくりの一環として米の直販にも力を入れている。2000（平成 12）年から始まった中山間地域直接支払制度の集落協定分 5 割を利用し、2006（平成 18）年には有限会社「とちくぼパノラマ農産」（以下、パノラマ農産）を設立した。現在 15 ヘクタール（2014 年時点）の

田んぼを営農している。現時点でパノラマ農産に耕作を委託しているのは22世帯であり、所有面積が小さいことや高齢を理由に委託している。それらの世帯には、土地借用の対価として一反あたり米一俵が支払われる。年間の収益は2000万円程度である。社長の他5名のパートを村人の中から採用し、パートには年間100万円程度の給与が支払われている。事業内容は米の直販、棚田オーナー制度、都市農村交流である。

パノラマ農産に委託をせず、自ら田畑を耕作しているのは15世帯であり、全世帯が兼業である。その多くがマキから耕作を委託されている。パノラマ農産で購入した機械は、石抜き機、自動式選別機、トラクター、コンバインであり、それ以外に社長の私物であるトラクター、コンバイン、田植機、収取り調整機を共同利用している。

社長は、むらの有力者の一人（Fさん・市議会議員）である。彼は有力なマキの出である。彼がパノラマ農産を設立したのは、高齢化による耕作放棄地の増加を案じたためだという。設立にあたってはもう一人の有力者（Hさん・元小学校校長）とともに進められた。今後の展望について聞いたところ、「土地を貸してくれる人が増えて皆で盛り上げていければ一番良い」が、賃金をどう払っていくかが問題であり、単収を上げて高く買ってもらうことが必要」だと言うことであった<sup>9)</sup>。

耕作放棄地対策としてはじめたものの、パノラマ農産の従業員も日々年を重ねている。そのために課題は多い。まず、会社のホームページに注文が来たとしても、メールを確認できる人がいないため注文に応えることができない。また、従業員が突然体を壊し、働けなくなることもある。管理する側としては大変だと社長は言う。今後、個人で耕作を受託している若者と協力していきたいということであった。

以上のように、むらの有力者が村人を「保護」する姿勢は、今でも存続している。むらの有力者であるFさんが中心となり「むら」を巻き込むことで、棚田オーナー制度や都市農村交流などのMURAづくりが成り立っている。

## 6.2 事例2.「栃窪かあちゃんず」の活躍

エコプラスが活動を始めた当初、世代・性別を問わない構成員（中学生以上）から成る「村作り会議」が定期的開催され、むらの課題、対策が議論されてきた。そこでむらの女性たちが発言する場ができると、女性を主体とした活動が考案されるようになった。「栃窪かあちゃんず」（以下かあちゃんず）は、60代の女性を中心に有志の任意団体として発足し、以来都市農村交流などのイベントにおける郷土料理の提供や野菜市の開催をしている。栃窪の60代以上の女性は、過去を振り返り「なんぎい思いしたて（難儀な思いをした）」ということが多く。嫁として家に入るといことは、時に自分を押し殺して生きることを意味していた。「なんでこんなとこ嫁にきたんだか。山から山へ嫁に来て」、「冬になるとじいちゃん出稼ぎ行ってっから、私が舅、姑、子どもの世話して。そりゃなんぎいのなんのって」など、悲観的である。しかし

今日、そのような女性たちは「外の人と触れ合う機会」を楽しんでいる。ちょっとした現金収入にもなるため、「嬉しい」という女性が多い。

活動を通じて、かあちゃんずはむらでの存在感を高めている。かあちゃんずが始動したばかりの頃は、活動に参加すると「でしゃばり」と責められる人もいたという。ここには「むら」の「非民主性」が見いだせる。しかし、現在では、都市農村交流をはじめとする様々なイベントでの活躍を通じて、多くの村人たちから頼りにされている。外から来る人々は、かああちゃんずの「飾らない」手作り料理を絶賛している。

### 6.3 事例 3. 棚田草刈アート日本選手権大会実行委員会

「棚田草刈りアート日本選手権大会」(以下、選手権)とは、田んぼの畦に文字や絵を描き、芸術性やメッセージ性を競う大会である。「村作り会議」で「都会の人にどうにか草刈りをやらせることは出来ないか」を話し合い、試行錯誤の上、2008(平成20)年に開始するにいたった。以来、むら内外から多くの人々が訪れる一大イベントとなっている。運営は50代の男性が中心となり、行っている。選手権には、性別・年代を問わず、多くの村人、都市住民、学生などが参加している。2008(平成20)年に開始して以来村人が優勝者として選出されてきた。しかし、2014(平成26)年には、長年参加し続けてきた東京からの参加者が優勝した。

村人の中には、むらの外から人が来ることを嫌がる人もいる。しかし、選手権では、外から来る人達が村人の生活を困難としている草刈りを手伝うこととなるため、「助かる」という人が多い。このように、「むら」を解放することが村人が日々直面している困難を軽減することで「有難い」という思いから、徐々に「外の人」に親近感を抱く人も存在する。

### 6.4 事例 4. アメリカからのインターン生受け入れ騒動

2014(平成26)年5-6月、栃窪はアメリカ・インディアナ州のアーラムカレッジからインターン生2人(ベロニカとテンジン)を受け入れた。両方女性である。ベロニカは、東日本大震災の後、岩手県の盛岡でインターンを6カ月していたため、日本語が堪能であった。テンジンは、インドのドラムサラ出身のチベット人であり、日本語は初心者であった。二人とも、将来は環境教育に関わって生きていきたいということであった。

このように、海外から人が来るというのは、村人にとっては「刺激的」なことである。栃窪に来る海外の人々の多くが「オーガニックな思想」の持ち主であるため、さらに「刺激的」である。有機農業をする者同士の「なかなかユニーク」な交流となっている。村人達は、「アメリカ人が来たんだがアメリカ人というのは本当にあういうもんなのか」、「トラックの荷台に楽しそうに乗ってウィンドを感じてるって」、「田っぼにいる時が一番楽しそう」などと観察し、不思議そうに首をかしげる。テレビで映される「アメリカ人」との違いを感じ、個人対個人の付き合いを通して様々な気づきを得ているようである。

しかし、「良い刺激」がある一方で「大変」な時もある。彼女たちの受け入れにともない、「誰の家に泊めるか」という議論がむら内でなされた。最初は3世帯の世帯主が「受け入れよう」と申し出たものの、「やっぱり年寄りがだめだって」、「トイレが水洗でないから」という話になり、結局、先に「支え人」として紹介したKさん宅以外に受け入れ先がなかったのである。エコプラスの職員が必死になって探したと言うが、最後まで申し出る世帯はいなかった。共同生活をするのにお金がかかることや言葉が通じないことが主な理由だった。しかし、「そんなの言い訳」で「本当はでしゃばることに抵抗がある」のだと言う人もいる。

しかし、Kさん夫婦は前向きである。「教育委員会からお金をもらって、一世帯4千円の補助をだすとかすればいいのよ」などと提案し、「むら」とMURAの折り合いのつけ方を考えている。

## 7 結論

豪雪地帯の山村で生きるのは決して楽なことではない。多くの高齢者が過去を振り返っては、「なんぎい思いました」や「みじめだった」と語っている。そのような状況を改善するために、栃窪は戦後から国、県、町に働きかけてきた。その結果、冬季の通勤が可能となり職場も確保することができた。しかし、人口は減少し続け、2006（平成18）年には小学校が廃校する寸前であった。そこで、村人はむらを解放し、エコプラスをむらに受け入れた。以来、栃窪はエコプラスと小学校と協働して環境教育を軸とするむらづくりに励んでいる。本論文では、その取り組みの中でも民際交流に注目し、「むら」の変容を論じてきた。

民際交流は、様々な側面から村人の生活を充実させていた。たとえば、異文化に触れることや自身の文化を伝えることに生きがいを感じる人、自ら海外へ出ようとする人、英語を勉強するなどして積極的に交流しようとする人などが出てきていた。このように、村人と海外との心理的距離が近くなっていた。また、世界規模の出来事を自身の生活とのつながりの中で考えることが出来ている人もいた。グローバルな視点から、栃窪で生きていくことの重要性を再考しているようである。

さらに、外から人が多く訪れることによって、栃窪の「暮らし」がむら内外で再評価されていた。村人たちは都市人や外国人が「すごい」という文化に誇りを感じ、むら外からは「何故あのむらに外から人がくるんだ」と不思議がられていた。高度経済成長期にかけて「平場」の人々から「劣った」地域と評価されてきた栃窪であったが、注目を浴びることで、自身の誇りを取り戻しつつある。

それは「定住」という選択にも影響していた。特に、栃窪の若者にその傾向が見られた。本論文では、多くの若者が積極的に「定住したい」と思っていることが明らかになった。むらに居ながら多様な人物に会うことができ、家計が安定しており、周囲の人間関係に満足できてい

れば「山を降りる」必要はないのである。むしろ、先に述べた価値の再評価が他出子の U ターンにつながっている。20 代は栃窪で環境教育を受けた最初の世代である。彼ら／彼女らは、高野さんの言うように、「自分たちがどこでどう暮らすか」「どう生きるか」について考え、栃窪で生きるという選択をしているようである。

一方で、「むら」の「封建的性格」や「相互扶助的性格」は依然として存続していた。それは、たとえば、マキや隣組での助け合い、区会における縛りの強さから見出すことができた。独居世帯や高齢者のみの世帯が増えるにつれ、そのような人間関係の維持が意識的無意識的に行われている。豪雪地帯であるからこそ特に、そのような助け合いが必要だとも言えよう。現在も区会を中心に村人の状況が(賦課基準の決定などを通して)把握され、そこでの意志決定をもとにむらを改善する試みがなされている。エコプラスが栃窪に来てからも同様である。そもそもエコプラスが栃窪に関わるようになったのが当時の区長の声かけによるものであった。それは、縛りが強いということでもある。区会議員が区会について語る否定的な口調からもそれは伺える。

しかし、「むら」の人間関係は変容しつつある。2014(平成 25)年度の区長は、家柄や肩書きではなく、人付き合いの上手さを基準に選出されていた。今後、よりフラットな関係性が築かれていくことが予想される。「全員がタメ語だ」という 20-30 代は特に、その傾向が顕著である。このような MURA と「むら」は、様々なかたちで共存していた。パノラマ農産の事例では、「むら」の有力者が中心となり村人を巻き込むことで、MURA づくりが成り立っていた。それらは時に「対立」することもある。かあちゃんず発足時の他の村人からの批難やアメリカからのインターン生受け入れ騒動がその良い例である。しかし、栃窪では「支え人」が間に入ることで、「むら」と MURA の折り合いをつけていた。

以上を考えると、民際交流によりむらが「変革」というよりも、むらの変容の中に MURA という過程が包摂されていると言う方が正しいことがわかる。MURA という要素がむらに取り込まれることによって栃窪は新たな局面を迎えている。栃窪は、「むら」という自治機能を持ちながら MURA という海外とのつながりやグローバルな視点を取り入れることによって、今後とも存続していく。MURA、そして「むら」として。



## <注>

- 1) 国土交通省の「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」による。
- 2) 本論文で「むら」を用いる際は、この意味による。単に、江戸時代から続く家の集合組織としての村落を指す場合には、むらを用いる。
- 3) たとえば、徳野は、「人口増加+経済成長=社会発展」という人口増加型パラダイムから「人口減少を真正面から受け止めた縮小型地域社会」へと考え方を移行することが必要だと主張している（徳野 2010: 32）。
- 4) 本論文において「支え人」という時は、以下のような人物を想定している。むらの文化や慣習も理解した上で「仕掛け人」の思想に共感し、仲介する村人ということである。
- 5) 調査対象者からの希望により、史料に記載されている個人情報に記載しないこととした。そのため、本論文では、同族、屋号、世帯構造などの情報を省き、それらを踏まえた上での筆者の見解のみ記載している。
- 6) 栃窪の村人は、塩沢町を中心とする近隣の盆地を「平場」と呼んでいる。
- 7) 「旧塩沢町行政別人口集計表」、「南魚沼市行政別人口集計表」による。
- 8) PBE という考え自体は高野さんが言いだしたものではない。高野さんがその考えを知ったのは、英国のエジンバラ大学在学中に博士論文調査のために訪れた北米の先住民たちを通してだという。ただ、日本では 100 年ほど前から、英語の文献では 1990 年代から、PBE に似た考えが見られる（高野 2014: 200-214）。
- 9) 経営規模としては「20-25h」、単収としては「(現在 1kg 400-500 円から) 700-800 円」が理想とのことだった。

## <引用文献>

- 秋津元輝、2009、「集落の再生にむけて—村落研究からの提案」村落社会研究会編『村落社会研究—集落再生農山村・離島の実情と対策』第 45 集、199-235 頁。
- 荒樋豊、2008、「日本農村におけるグリーン・ツーリズムの展開」村落社会研究会編『村落社会研究第一—グリーン・ツーリズムの新展開農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』第 43 集、農文協、7-42 頁。
- Ecoplus「最新ニュース」<http://www.ecoplus.jp/showindex.php?lang=ja&genre=9> (2015 年 12 月 30 日アクセス)。
- 福武直、1946、「農村民主化の課題」『日本評論』第 21 巻第 12 号。
- 小内純子、2007、「担い手としての高齢者」日本村落研究会編『むらの社会を研究する』農文協、124-129 頁。
- 宮城道子、2008、「グリーン・ツーリズムの主体としての農村女性」村落社会研究会編『村落社会研究—グリーンツーリズムの新展開 農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』第 43 集、農文協、95-126 頁。
- 中野卓、1966、「『むら』の解体（共通課題）の論点をめぐって」村落社会研究会編『村落社会研究第 2 集』塙書房、255-282 頁。
- 中田実、1993、『地域共同管理の社会学』東信堂。
- 佐藤康行編、1997、『百姓の民際交流—タイ農民との交流から学んだこと—』名古屋大学大学院国際開発研究科。
- 高野孝子、2010a、「場の教育の実践」岩崎正弥、高野孝子『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈』

山村における民際交流を通じた MURA づくり (田村優)

第 12 集、農文協、195-278 頁。

高野孝子、2010b、『地球の笑顔に魅せられて—冒険と教育の 25 年—』海象社。

高野孝子編、2014、『Place Based Education 地域に根差した教育—持続可能な社会づくりへの取り組み』海象社。

徳野貞雄、2008、「農山村振興における都市農村交流、グリーンツーリズムの限界と可能性—政策と実態の狭間で」村落社会研究会編『村落社会研究—グリーンツーリズムの新展開 農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』第 43 集、農文協、43-93 頁。

徳野貞雄、2010、「縮小論的地域社会理論の可能性を求めて—都市他出者と過疎農山村—」日本都市社会学会編『日本都市社会学年報』、27-38 頁。

鳥越皓之、1994、『地域自治会の研究—部落会・町内会・自治会の展開過程—』ミネルヴァ書房。

主指導教員 (中村潔教授)、副指導教員 (佐藤康行教授・渡邊登教授)